
たとえ、世界を滅ぼしても ~ 第4次聖杯戦争物語 ~

壱原紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たとえ、世界を滅ぼしても ～第4次聖杯戦争物語～

【Nコード】

N6086Z

【作者名】

杏原紅

【あらすじ】

初恋の女性とその娘達の幸せの為、そして自分とは違う男への憎悪を胸に間桐雁夜はサーヴァントの召喚へ挑んだ。さりとして、その根底にある祈りはただ一つ

「自分はどうなってもいい、でもあの子《桜》だけはこの地獄から救い上げたい」

そして現れたのは……

これは、あまりにも魔術師にはふさわしくなかった「人間らしい」
マスターと、
心を狂わせ贖罪の機会を望み狂い続ける、「哀れな」狂戦士に堕ち
た騎士と、

1つの世界を滅ぼして1つの世界を救った、「愚かな」英雄の物語。

英霊召喚（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。

それでも見てやろう！という心優しい方は、どうぞ閲覧してくださいませ。

英霊召喚

「!!!!!!!!!!」

その時の事を、彼は今でも覚えていた。

「消えろ、貴様の存在はあまりにも赦しがたい・・・!!」

自らと救いたいと願った少女を、あの地獄から助けてくれた2人の騎士を

対になるような、黒き騎士と白き騎士の姿を

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ。繰り返すつどに五度、ただ満たされる時を破却する。」

暗く冷たい地下のそこで、その詠唱は行われていた。

言葉を紡いでいるのは一人の男、その彼の後ろの方には一人の翁が立っている。

「告げる。汝の身は我が下に、わが命運は汝の剣に。」

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。」

願いが、ある。

どうしても、叶えたい願いがある。

この身をかけてでも、助けたい、少女がいるのだ。

(その為になら、俺は・・・！)

相当の激痛が体に走っているのだから、彼は詠唱を止めない。

片目からは血涙が流れ、仮面のように固まった頬の下で虫が騒ぐ。

それでも・・・雁夜は言葉を紡ぎ続ける。

「されど汝はその目を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖をたぐる者。」

(あの子を、桜ちゃんを！)

分かっている、分かっていた。

この言葉を紡いだ時点で、自分の命は『絶対』に助かる事はなくなっただと。

あの爺が、自分の助けになるような事を助言する等、ある筈がないと。

「汝三大の言霊を纏う七天！」

分かっている、自分は

(狂っていても構わない！俺を食い殺しても構わない！だからあの子を！)

桜、自分が好意を寄せていた女性の娘。

まだ幼い少女が、自分がこの呪われた間桐家から逃げ出したばかりに、あの子が犠牲になってしまった。

非力な幼い少女がこの耐え難い現実に対抗するには、その心を殺してしまうしかなかった。

かつて自分に見せてくれた、記憶に残る彼女の姿はもはやない。

もし、自分が桜を助ける事が出来ても、その心が元通りになる事はきっと無いだろう。

犠牲になったものは多く、この少女が背負うにはあまりにも味方がいない。

家族の元に帰せても、再び元の笑顔を取り戻せるとは限らない。

そして、その隣に自分が存在し、守り、慈しみ、共に生きるのはこの体では叶えられない。

どれだけ間桐雁夜が手を尽くしても、このままでは、桜は永遠に救われないのだ。

それでも…俺は…

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

(桜ちゃんを、助けたいんだ！)

眩い光が暗い地下を照らし出す。

視界が光に包まれるのを見て、雁夜はその場に膝をついた。

魔力を根こそぎ奪われ、それでも必死に自分が呼び出したであろうサーヴァントの姿を求めぬ。

そうして、雁夜は驚きに目を見開いた。

「二人」、いる。

黒いフルプレートを纏った黒い騎士、呼び出そうとした狂戦士バーサーカーにふさわしい騎士。

だがもう一人、その隣に立っているのは……

「問おう、貴方が『我ら』を招きしマスターか？」

肩ぐらいまでの白銀の髪、明らかに理性を宿した蒼色の瞳、そして静かに響き渡る澄んだ声。

雁夜より少し背の高い程度の、中性的な顔立ちをした青年がそこに立っていたのであった。

英霊召喚（後書き）

多くの小説家さん達に魅了され、初心者ながらビクビク投稿いたしました！

不定期更新となりますでしょうが、あきれず見守っていただければ嬉しいです。

これから頑張って更新していきます！

脳内会議（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。ご了承ください。

それでも見てやろう！という心優しい方は、どうぞ閲覧してくださいませ。

脳内会議

聞き取れない声、湧き上がる黒い魔力、はっきりと直視出来ない歪みを漂わす黒き騎士がいた。兜を被って見えないその瞳、けれど確かに狂える意思を感じざるをえない、赤い光が見えた。

「問おつ、貴方が『我ら』を招きしマスターか？」

そうしてそれに続くように、静かな声が響き渡る、その声は余りにも静かで、そしてそれを紡いだ白銀の剣士の表情は逆に・・・とても、穏やかだった。

なのに何故だろうか、その穏やかさが逆に、とても

「どつしたのです？何故返事をしてくれないのですか？」

思わず、息をのんで彼らを見つめていると、不思議そうな声が響いた。
困ったような表情に、雁夜は魔力切れでうまく動かない体を動かし、銀色の騎士に答える。

「ああ・・・そうだ、俺がお前達のマスターだ・・・っ！げほっ！
ごほっ！」

何とか声を出して、そして同時に咳き込んでしまう。
まともに立っていることも出来ず、雁夜は思わずその場に倒れこんでしまった。

やはり、なんのイレギュラーか知らないが、
二体のサーヴァントを呼んでしまった為か、体にかかる負担は予想以上に大きかったようだ。

(くそっ・・・サーヴァントや爺の目の前でこんな醜態を晒してしまうなんて・・・しかも、一方は狂化してないとかどうなってるんだ！？)

だがこうして召喚出来た以上、彼らは自分のサーヴァント。
それに、しっかりと話が出来るのなら、もしかしたら桜を助けるのに一番の障害となるであろう
間桐臓硯を倒すのを手伝ってくれるかもしれない。

何とかそこまで考えて、起き上がろうとした、その時

『・・・どういうことです、マスター・・・その身に何を飼っている？いや、寄生されているのか・・・その理由、説明して頂けますか？』

頭の中に、直接語りかける声が響いた。

「な・・・」

啞然としてしまう、今、目の前のサーヴァントは何と言ったのか？

「大丈夫ですか？マスター・・・貴方は我らを呼び出したのです、余り無理はなさらず。」

『ダメですよマスター、下手に声に出してはその蟲翁に気付かれてしまいます。出来ればこのパスでの会話は長引かせる訳にはいかないのです。』

穏やかな笑顔のまま静かに白銀の騎士が俺に触れ、そのまま抱き起してくれる。

だがそれ以上に頭の中に響く声が、それを告げていた。

「どうやら、貴方はこの召喚で魔力の消費が激しいようですね・・・休む部屋はございますか？お連れいたしますのでどうか我らに指示

を。」

『あの蟲翁は明らかにまともでは無い、それに貴方からのパスは虫アレに対しての嫌悪感を告げている・・・虫アレは貴方の敵ですね？そうならば頷いてください。』

コイツは、このサーヴァントは気付いているというのか。

あの爺が人間でもなければ、まともな魔術師ですらない化け物だという事に・・・！

呆然としてしまいそうになりながらも、思わず頷いていた。

敵かと問う声に、それは事実だと告げる為に。

「そうですか、ならばお連れいたします。」

「待て。」

だが、穏やかな笑みを深めてそのサーヴァントが頷いたと同時に、背後からしわがれた声が出た。

「・・・なんだよ、爺・・・召喚は無事すんだ、部屋に戻ってもいいだろう・・・」

（っ、今の今まで黙っていたにも関わらず、何故今話しかけてくるんだ・・・っ！）

ギリッ、と歯を喰いしぼり精一杯睨みつけるが、声をかけた臓硯は

楽しそうに言葉を続けてくる。
お前の苦しむ顔こそが、楽しくて嬉しくて堪らないのだと言わんばかりに。

「何、よもや貴様が英霊を二体も召喚する等思っておらんかったからう……久しぶりに、表に出てみたくなつたわけじゃよ。」

「なっ……まさか!？」

そのまま続けて言われた言葉に愕然とする。

そんなと考えたくない可能性に絶望してしまいそうになる。

「察しが良いようで助かるわ、儂にそちらのサーヴァントを寄越せ雁夜……分かっておろう、貴様の魔力では二体のサーヴァントを維持する事は、不可能だと。」

「っ、それ……は……」

答えられるわけがない、事実その通りだからだ。

呼び出しただけで生きているのが奇跡に近い、実際今もこの銀の騎士に支えられている自分が二人分の魔力供給に耐えられる筈がないのだ。

「ふん、ならばさっさと儂にその貴様を支えている方のサーヴァントを渡すがいい、貴様は元よりバーサーカーのマスターになるつもりだったのであるうが……イレギュラーになるであろうサーヴァントを貴様が従える事は出来るまい。」

「……！」

(どうすればいい、どうすれば……！)

臓硯は理性のあるこのサーヴァントを自分から引き離す事で、万が一にでも己に反抗する可能性を潰そうとしているのだ。

そんな事を認めれば、恐らく先程感じた一寸の希望すらも確実に消えてしまうだろう。

だが、今此処でそれを拒絶すれば体の中の蟲がこの身を食らいつくすかもしれない。

(今すぐにも、桜ちゃんを助けられるかもしれないのに……！)

悔しくて堪らなかった、こんな時にこのまま要求を呑むしかないと理解してしまうのが。

そうしなければならぬのだと、嫌でも感じてしまうのが。

どうして自分はこんなにも

だがどうしようもない、この味方になってくれそうだったサーヴァントを裏切ってしまうしかないのだと雁夜はそう判断しようとした……が

「マスターすいません、ちょっと眠っててください・・・今から、
その人外をぶち殺しますので。」
「えっ？」

頭上から降ってきた穏やかな声に意識が止まる。

同時に首に軽い衝撃を感じて、雁夜はそのまま倒れ伏す。

だが、何故かその時、自分の右手の指に何かが詰められたような・・・
・そんな感覚を最後に雁夜の意識は完全に闇へ沈んでいったのだっ
た。

脳内会議（後書き）

突然の謎のサーヴァントのパスを通しての会話、戸惑い困る雁夜おじさん、空気になりかけているバーサーカー、KYな蟲翁・・・色々突っ込みどころ満載の話です・・・っ！駄文、申し訳ございませんでしたm（――）m

次回「悪鬼討伐」、頑張って更新します！

気が向いたら見ていただけると嬉しいです・・・！

悪鬼討伐（未遂編）（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

悪鬼討伐（未遂編）

気を失わせたマスターを肩に担ぎあげながら、騎士は目の前の翁を少し見て・・・結論を出した。

（・・・ああ、殺せないな、この蟲爺は個体じゃなくて集団だから、真つ当な魔術師や英霊では無理だ。）

正直なところ、【彼】は気付いていた。

『今の』自分とこの状況では、目の前の「蟲の姿をした魔術師」は殺せないだろう、と

外道には外道をぶつけない限り、大した致命傷すら与えるのは困難である、と

（だから、とりあえずマスターには「保険」をつけたが・・・まったく、生前からもそうだが、面倒な相手ばかり敵に回るな。

しかし・・・殺す、と断言していた手前、やっぱり出来ませんでした！と言うのも問題があるな、マスターとの関係に溝を作ってしまった。

さて、どうしたものか。）

内心そう呟くと、彼はまいったなと溜息を吐いた。

「つかかか！無駄じゃ無駄じゃ！儂を殺す？たかがサーヴァント風情がそんなこと出来る筈がなかるうて！」

蟲は笑っている。

愚かな事を口にしてしていると理解した上で、こっちは何も出来ない判断しているのだから。

それは当然だろう、こちらの方はマスターの命がかかっているのだから、今すぐにあの蟲を殺せる訳が無い。

ただし・・・それはこちらが、【マスターの意思を顧みるなら】、という条件が付くのだが。

「ああ、そうだ、我らに『貴様という魔術師を殺す術』等無いとも。」

「・・・何？」

「我らのマスターの中にいる虫は貴様の使い魔だろうか？そんなものが内にいると分かっているのに易々と手等出せる訳が無い。

マスターを内側から潰されて、この身を形成している魔力が『数分』で尽きて我らが消滅するのが目に見える。」

「ほう、気付くか、ならば分かるであろう・・・所詮雁夜如きが呼び出した、バーサーカーのオマケで出てきたバグ風情が儂に刃向う事が無駄なのじゃからな。」

「バグにオマケか・・・まあオマケだろう、実際そのせいで私のステータスは随分下がってしまったているしな。」

「・・・」

あっさりと銀の騎士が肯定し、すらすらと会話を続けてくる事に、思わず臆視は笑うのを止めた。

この明らかに穏やかな表情をしている騎士が、何故か・・・【異常なモノ】に思えたのだ。

笑っている、笑っているのに・・・【笑って】いない。

「・・・なんじゃ、貴様は」

「・・・それを聞くのか？今貴様が言っただろくに・・・『バーサーカーのおまけで出てきたバグサーヴァント』だと。」

「良いのかの？軽々しく口にしておるが、僕は貴様の言うように今すぐにでも雁夜を殺せるのじゃぞ。」

「ああ、それも承知の上だ・・・だがな、もしそれをすれば、貴様はとんでもない失態を犯したと後悔する事になる。」

「・・・ほう」

「そう、例えば」

すっ、と目を伏せて数秒、軽く考える素振りを見せると、銀の騎士は小さく笑って言った。

「我が宝具を開放し、【貴様以外のこの屋敷の人間を一人残らず皆殺し】にする。」

別に構わないだろう？貴様には【直接】の被害は無いのだから。」
「ぬうっ・・・！？」

ざっ、と血の気が引くように・・・もっとも、この翁に血が通っていればだが、明らかに翁は動揺した。

それに畳み掛けるように、騎士は淡々と言葉を続ける。

「それと・・・そうだな、私の魔力が尽きるまで、この屋敷で大暴

れさせてもらおうか？

丁度そこに、良い殺し合いをしてくれる相手バーサーカーがいるしな。

ああ、そんな事したら聖杯戦争の他の参加者がゾロゾロやって来るかもしれない。

もしかしたら・・・この家の事を探ろうとして、うっかり他のマスターが踏み込んでくるかもしれないな。」

「き、貴様・・・！」

「何故怒る？我らのマスターを【害したら】の話だ、もっとも・・・そうなれば、この【蟲の集積所】がどうなるかは知らないがな。」

静かに、穏やかな声で、まるで今日の天気を語るかのような気安さで、そのサーヴァントはこう告げていた。

【私のマスターに軽々しく害をなせば、お前の言う『魔術師の跡継ぎ』と『潜んでいられる安全な場所』が無くなるぞ】、と

それは、立派な脅迫だった、まともな人間なら思わず怒鳴り散らしてしまいたくなる程に分かりやすく。

自分の方が立場が悪い筈なのに、明らかに逆らうなと言わんばかりの傲慢さが見える程に。

目の前の、騎士の姿をしたサーヴァントは、本気で間桐臓硯を脅しにかかっていた。

実際、この英霊が言っている事を本気で実行されれば、その損害は

計り知れないものになる。

今まで誤魔化してきたが、娘を養子に差し出した遠坂の小倅や、此度の聖杯戦争に参加しているアインツベルンや時計塔の魔術師が、突然崩壊するだろう間桐家の跡地に偵察に来ない等、あり得ない話だ。

臓硯は生き延びれるだろう、その使い魔たる蟲を、町に放ち一匹でも生き長らえれば、なんとかなるかもしれない。

しかし・・・万が一にでも、今の今まで土地の管理人たる「遠坂家」の足元で、「人喰い」を行っていたのだと気付かれれば？

間桐臓硯の『延命』の手段に興味や不信を持たれ、時計塔が、魔術協会が、そして代行者が動くものなら、どうなるだろうか？

そして、臓硯が死んでいないと、何かの拍子で気付かれでもすれば・・・その結末は火を見るより明らかだ。

だからこそ、このサーヴァントは、【雁夜を害するな】という条件を事前に付けてきており、この臓硯の掌から雁夜ごと逃れようとしているのだ。

お前がこちらに手を出さなければ、こちらもお前の困る事はしないでおく・・・と。

マスターが「敵」と断じた臓硯の姿を見て、殺せないと理解したと同時に『脅迫』を選んだサーヴァント。

日の下を堂々と歩けないだろう、地下の蟲蔵よりも腐臭のする体に、【彼】は臓硯が真つ当な存在ではないと気付いた。

後ろめたい事を続け、罪悪感を感じていない者には正攻法等「無意味」、同じ外道として対面する方が良いと【理解している】が故の

行動だった。

だが、臙硯とてただの魔術師ではない。

聖杯戦争の始まりを作り上げた、マキリの当主にして600年の時を生き続ける、大魔術師^{怪物}、なのだ。

この程度の脅しなど、幾らでも返答しようがあるのを理解している。

(この、目の前の『英霊如き』、早々に黙らせこの掌で踊らせてくれるわ……！)

そう考え、臙硯はあえて顎に手を添え、理解出来ぬと頭を振り。

その『事実』を教えた。

「……分かっておるのだろうか？ 貴様の言っておる事は、貴様のマスターの意思に反しておるのじゃぞ。」

「ふむ、それはどういう意味だろうか？」

「雁夜の願いは跡継ぎとして連れてきた娘を、桜を遠坂家に帰してやる事じゃ……この屋敷を破壊し、アレに手を出せば貴様のマスターが黙っておらんぞ！」

「……」

その言葉に、銀の騎士は穏やかな表情から驚きに目を見開く。心底驚いた、と言わんばかりの表情に、臙硯はニヤリと笑う。

(やはり、所詮はたかがサーヴァントじゃな……この程度の事実で戸惑うか)

その様子に、間桐臓硯は余裕を取り戻し

「ああ……それで？マスターの命を守る事と、その娘の安否に【一体何の関係がある】と？」
「な……っ？」

だからなんだと、心底どうでもよさそうに、下らない妄言を聞いたと言わんばかりに嘆息した騎士の言葉に、絶句した。

そして、理解する。
理解して、しまった。

この目の前のサーヴァントは、確かに『狂って』いるのだと。

これが、英雄だと？

そんな馬鹿な話があるか、これは……悪霊か何かの間違いだと。

その笑顔に騙された、その口調と声色に騙された、その穏やかさに騙された！

笑って等いない、慈しんで等いない、己のマスター以外の全てが、このサーヴァントには『どうでもいい』のだ！

このサーヴァントは、決して、真つ当な『英雄』ではない！
少なくとも、己のマスターが血反吐を吐きながら救いたいと嘆く命を、『くだらない』と言い切る『悪霊』だ！

「私はそもそもその娘を知らない、マスターから直接頼まれた訳でもないのに、何故マスターを害す存在である貴様の言葉を鵜呑みに出来る？」

その発言が嘘ではないという証拠は何処だ？なあ翁よ・・・何か勘違いしているようだから言っておこう。

・・・私は、【このマスター間桐雁夜に呼ばれ、彼が気に入ったから守る、ただ、それだけのサーヴァントでしかないんだよ。」

故に、臓硯はその言葉を受け入れるしかない。

あのサーヴァントに、今人質として通用するのは雁夜だけなのだ、雁夜が桜の事をこのサーヴァントに命令しない限り。

このサーヴァントは、桜が【雁夜の障害になる】と判断したと同時に、その命を奪うだろう。

そう言うと、【彼】は踵を返して地下から出て行こうと歩いていく・・・こんな言葉を、残しながら。

「案ずるがいい、この魔術師の家の長よ。」

我らのマスターが勝利を望むならば、我らは【己の願い】の為に
も協力は惜しまない。

貴様には聖杯が必ずや齎される……どのような願いを持ち、ど
のような祈りを捧げるかは知らぬが……」

背後から、凄まじい憎悪の視線を投げつけてくるマリキ・ソルケン間桐臓硯の視線を
浴びながら。

「我らのマスターに【余計な真似】だけはするなよ？」

そして、聖杯を手にした時、マスターとの【約束】を守ってくれ
さえすればいい。

それさえ守ってくれるのならば その手に、聖杯を届
けよう。」

「……いいじゃろう、精々口先だけにならぬようにするがいいわ。
……だがその前に答えよ！貴様は、何のクラスで招かれた！！」

ぶつけられた罵声に近い問い掛けに、出口に向かう階段を上がりな
がら、【彼】は振り返る。

その表情は

「この身は聖杯に招かれし、第八のサーヴァント・【ドラグーン】
龍殺し」

┌

吐き気がする程、穏やかで綺麗な笑顔だった。

悪鬼討伐（未遂編）（後書き）

はい、そういうわけで、表だって臆視は雁夜おじさんを痛めつける事は出来なくなりました！

・・・うん、此処まで黒くなるとは思わなかったのですが、このオリジナルサーヴァントさん、しっかりとバーサーカーを呼び出す呪文の影響を・・・受けているわけではありません（！？）

【彼】は本当に主人である「間桐雁夜」しか優先していません。その命さえ守られれば構わない、誰も彼も助けようと頑張る「正義の味方」ではないのです。

次話は、目を覚ました雁夜おじさんと二人のサーヴァントの自己紹介編（？）。更に次話で、雁夜おじさんの負担を『微妙』に減らしてくれるアイテムの紹介編です。

それでは、此処までの閲覧、どうもありがとうございました。

夢幻湖畔（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

お気に入り登録してくだってる方がいらっしやる・・・！
嬉しくて泣いてしまいそうです！本当にありがとうございます！
これからも頑張って書いていきますよっ！

夢幻湖畔

よもや、呼び出されてこんなに不愉快な気分になるとは思ってもみなかった。

「じほっ！げほ・・・っ！」

己が問いに答えると同時に、ビシャビシャと蟲交じりの吐血を繰り返しながら、その場に蹲る哀れな己がマスターの姿に。

その姿を後ろから面白いものを見ていと言わんばかりに、こちらを品定めするように見ながら、ほくそ笑んでいる翁むしの姿に。

そして、恐らくだが目の前の「自分のマスター」が苦しんでいるにも関わらず、自らの隣でただ狂いながら指示を待ち見ているだけの黒い騎士に。

だから【彼】は笑ってた、それはもう穏やかであろう笑みを、心の底から浮かべていただろう。

翁むしはそれに気付いていないが、当然だろう、そんなへマをするほど単純な思考も行動もしてないのだ。

それに生前はそんな聖人みたいな人間じゃなかったし、そもそも自分がお綺麗な騎士様だと勘違いしてくれるに越した事はないのだから。

だが、繋がっている魔力供給のパスのおかげであろうか？

何となく自分のマスターは己の笑顔に違和感を感じていたようだ。

正直これは喜ばしい、上つ面の笑顔に騙されるような馬鹿なマスターでは困るのだ。

ついでに流れ込んでくる魔力も喜ばしい、細い細い頼りないラインだというのに、その魔力は清流のようにとても綺麗だった。恐ろしい外見にも関わらず、その魂の質を感じさせる魔力・・・成程、己のマスターは限りなく【善】よりの人間なのだろう。

なのに、その中に黒い滲みのような負の感情がある。そう・・・それを、自分はよく知っている。

これは【憎悪】だ。

それも、力さえあれば人を一人呪い殺せる程の。

(・・・ああ、このマスターは本当に『人間らしい』、死なすのはもつたない、マスターは【とても好ましい人間】だ。)

だから、『まだ』落ち着いていられた。

どれだけ周りが気に食わない状況でも、冷静だった。

自分の勝手な行動で、マスターが死ぬような状況になつては困るのだ。

故に問いかけた、口には出さず心で、翁むしに聞かれないように。

『何故か』魔力供給ラインが混線している為、自分ともパスが繋がっている狂戦士にも聞こえるように会話を続けていた。

（うん、このマスター『だけ』は何よりも優先しておこう。
このマスターはきつと、『自分の大事な者だけは捨てられない』ど
こか甘くて抜けてる人間だから。）

そんな、独善的で自分勝手に、一方的な事を考えながら

穏やかな笑顔のままだった、穏やかな声色のままだった、まさに人
好きされるような笑顔だった。

だがそれでも、はつきりと言ってしまおう、その英雄は

呼び出される前から壊れてコッレテいたのだと。

・・・夢を見ている

目の前には、静かな湖

今まで、見た事のない美しい水面が見える。

ああ、カメラが欲しい、今この景色を写真に残したいのに

・・・でも、こういうのも悪くないな・・・ああ、本当に・・・

『！』

・・・誰だ？

『！』

悲鳴？いや、こねは・・・

『！』

・・・泣いて、いるのか？

思わず、声の主を探そうと、自分はその場を動こうとして・・・

』

！！！！！！！

『！！！！！！！！』

その凄まじい咆哮に中てられて、そのまま意識を飛ばしたのだった。

・・・。。。。けれど

最後に、湖の畔に人影が見えたような気がした。

姿も、顔も、何故泣いていたのかも分からない。

ただ、それが何故か酷く

．．．目を覚ますと、そこは自分の部屋だった。

「う．．．？」

呆然と、見知っている天井を見つめながら、雁夜は瞬きを繰り返した。

そのまま現状を把握しようと、鈍い頭を回転させる。

（は？何だ？何で俺は部屋で寝てたんだ？昨夜は確か地下で．．．
っ！）

サーヴァントの召喚、現れた二つの人影、倒れた自分、そして

「ああ、気が付いたようですね、マスター」
「っ！？お前っ！」

やっと昨夜の事を思い出したと同時に、顔を覗き込まれて息を呑んだ。

肩にかかる程度の銀髪が揺れ、蒼色の瞳が穏やかな雰囲気を漂わせている。

見様によつては女性とも思える風貌でありながら、そのしつかりとした声が、

【彼】を男性である事を示している。

だが、即席とはいえ魔術師である雁夜には分かる。

その身に溢れる魔力は、決して並みの存在には保持出来ない量である事を。

何よりも、目の前の青年は、まさしくこの手で呼んだサーヴァントの一人だと。

今だ名も知らぬ白銀の騎士が、ベッド脇に立ち、自分の事を見下ろしていた。

「少しは回復しましたか？随分と消耗していたようですので、勝手とは分かっていましたが、お部屋に運ばせて頂きました。」

「あ、ああ・・・というか、此処まで運んでくれたのか？ありがとうな。」

にこり、と笑顔を浮かべて告げる騎士に、雁夜は戸惑いながらも礼を言う。

実際、地下に放り出されたままでは辛かったので、その行動はありがたかった。

下手に残っていれば、臓硯に何を言われ、何をされるか分かったものではないからだ。

・・・と、そこまで考えて、雁夜は唐突に思い出した。

<マスターすいません、ちょっと眠っててください・・・今から、その人外をぶち殺しますの。>

「っおい、お前あの後・・・！」あ、大声禁止ですマスター、その少女が起きてしまいます。「・・・はっ？」

ベッドから上半身だけ起き上がり、雁夜は声を荒げようとしたが、そのままある場所を指さして言ったサーヴァントの行動に釣られて視線を下げる・・・と。

「えっ！？ちよ、桜ちゃん！？何で此処にむぐっ！？」
「ああだから、マスター静かにしてあげてください……」

自分の隣で、すやすやと眠っている、大切な少女の姿に本気で驚いた。

雁夜は思わず絶叫し……ようとして、サーヴァントに手で口を塞がれた。

勿論、すぐに離してくれたのだが、どういふことだと小声で問い詰めれば、あっさりと返答が帰ってきた。

「……つまり、俺を運んでいる最中に、桜ちゃんに出くわしたと？」

「はい、そしてマスターが死ぬのではないかと危惧されたようで、一緒に傍にいたいと。」

「さ、桜ちゃんが……そんなに俺を心配してくれたのか……？」
「そうですね、実際【我ら】が此処に居るので大丈夫と説明はしましたが、

『おじさんの傍にいる』、と言われてそのままベッドに潜り込んでしまいました。」
「……っ」

サーヴァントの言葉に、雁夜は息を呑むと、眠っている桜の頭を優しく撫でた。

そうして、この事実が夢ではないと思い、喜びで胸が震えた。

昨夜、召喚の儀式を行う前に、完全に変わってしまったのではないのかと不安になった少女の姿。

自分に家族と呼べる存在はいないと、諦めてしまっていたこの子が、自分を案じてくれた。

まだ、桜の心は壊れてはいない！今ならまだ、桜の笑顔を取り戻せるかもしれない！

（桜ちゃん・・・まだ、まだ君は間に合うんだ！必ずこの家から君を開放してみせる！

だから、待っていてくれ・・・あの【約束】は、必ず果たしてあげるから！）

そう心の中で誓い、麻痺していない右手を握り締める雁夜の姿を、サーヴァントが見つめていた。

穏やかに笑う白銀の騎士と・・・もう一人、姿を見せていない、狂っている黒き騎士が・・・

ただ、その姿を、見つめていた。

夢幻湖畔（後書き）

前回の終わりから、雁夜おじさんのターンです。色々と飛んでいる展開ですが、この幕間もその内語られる事になります。

そして、ここから雁夜おじさんの聖杯戦争が幕を開けていきます。

原作とは違った運命、あり得ないサーヴァントとの共闘、そしておじさんが視た【夢】は・・・

今回は『主従契約』、おじさんとドラグーンの対話をお楽しみください！

それでは、ここまでの朗読、ありがとうございましたm（――）

m

主従契約（自己紹介編）（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーバントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

主従契約（自己紹介編）

「・・・さて、何処からお話ししましょうか・・・」

「とりあえず、全部だ。俺が気を失ってからの事を話してくれ。」

場所は変わって、雁夜達は間桐家のリビングに移動していた。

眠っている桜をそのままにしておくのは可哀そうな気もしたのだが、穏やかに眠っていられるのも良いことだろうから、そっとしておいてあげた。

下手に会話を聞かれるのも拙いので、余り人のいないリビングでの会話。

運も良く、今はあの爺が眠っている朝なので、遭遇する事もないだろう。

「そうですね、では、マスターには最初にお詫びしておかなければいけません。」

「・・・やっぱり、爺は殺せなかったのか・・・」

「!・・・怒らないのですか？」

「そんな簡単に殺せる奴だとは思っていない・・・そもそも、臍硯アレが本当の姿かも怪しいんだ・・・けど、サーヴァントでも奴は殺せないのか・・・くそっ!!」

だんっ!とテーブルに右手を振り下ろす雁夜に、サーヴァントは少し眉を潜める。

そのままスッ・・・と周囲に目をやると、微かに【微笑んで】声を

かけてきた。

「マスター、少しよろしいでしょうか？」

「何だ？」

「ええ、少し時間を取らせる事になってしまいましたが、お話しい事がありません。」

出来る限り【集中】して聞いてください。」

「?・・・ああ、分かった。」

その笑顔に、何故か呼び出した時と同じような【違和感】を感じながらも、雁夜は了承する。

サーヴァントは嬉しそうに頷くと

「そうですね、ありがとうございます。」

『とりあえず、重要な事だけはパスを介して念話で話す、聞き逃さないでほしい。』

「・・・!」

口になっているのは、全く別の口調で精神に直接語りかけてきた。

「私は貴方の名前を知りません、そして貴方は私のクラスを知らない・・・まずは自己紹介をしたいと思います。」

『声に出して情報を口にするのは危険だ、何処に目があり耳があるか分からない。』

私が重要な事を話す時は念話を使用するので、出来れば早く慣れて貰いたいんだ。』

「っ・・・あ、ああそうだな、俺の名前は雁夜だ、間桐雁夜。」

『わ、分かった・・・けど、この声に出して話す必要はあるのか？少し混乱しそうだ・・・』

「カリヤですね、ありがとうございます・・・私は『ドラグーン』のサーヴァント。真名は・・・。」

『混乱するのは無理もないだろう、しかし、これも【敵】の目と思考を欺く為だから耐えてほしい。』

それと・・・』

「・・・申し訳ございません、実は同時召喚による弊害か、記憶が曖昧で思い出せないのです。」

『実は、魔力供給による供給量が少なすぎるせいで、ステータスが大幅に減少して弱体化しています。』

これではまともに戦うどころか、【自動で発動している】以外の宝具も使えない。それと、真名は忘れてないですが【今は】秘密です。』

「『えええええええ！？』っ・・・何がはあっ！？・・・」

「カリヤ！大丈夫ですか！！」

とんでもないカミングアウトに、思わず立ち上がり体と心で驚きの声をあげてしまう。

そのまま血を吐き蹲る背中を、ドラグーンが慌ててさすってくれ。だがそんなことどうでもいい、というより無視出来ない内容が多すぎてパニックになりそうだ！

「ちよ、おま！魔力が足りないって！どういう事だ！？」

「それはマスターが、バーサーカーか私のどちらかのみを呼んだのではなく、二人召喚したのが原因です。」

「そもそもこの状態で済んでいるのも、私の保有スキルとその右手の【宝具】のおかげなんだ。」

出なければ、カリヤも私もバーサーカーもとつくの昔に死んでしまっているぞ。」

「あ・・・そういえば、バーサーカーは何処なんだ？」

「カリヤ・・・彼ならずと貴方の傍に控えています、彼も私も貴方の命令無しで勝手な行動はしません。ましてや供給量が少ないのは私が引き受けていますが、彼の消費量が多いのです。」

出来る限り温存する時はしておく方が得策ですから。」

「勿論、カリヤが眠っている間は私も霊体化していた、必要以上に現界していると魔力が勿体ないのもあるがカリヤへの負荷が大きす

ぎる。

今現界しているのは、カリヤに今までの状況の説明やこの話を話す為だ・・・バーサーカーは喋れない、その為私とその役を一任したんだ。

だがそれに力を発揮し、この状態を維持しているのは、カリヤが今している【指輪】に他ならない。』

その言葉に、ふと自分の右手を見ると令呪の刻まれているその手の指に、金色の指輪が填められていた。

自分の枯れ木のようになってしまうっている指に、しつかりと填まっているのが逆に不思議で戸惑いながらも雁夜は聞き返す。

「これは・・・何だ？俺はこんなの・・・」

「勝手な行動とは分かっていましたが、召喚されて気を失われた後、私が付けさせていただきました。

それは【ある人物】の宝具なのですが・・・現在、私が【預かっている】だけのモノです。マスターの魔力を多少回復してくれます。

」

『その【宝具の能力】は、本来の持ち主しか使用出来ません。』

その為、現在その指輪は周囲の^{マジックアイテム}大気を吸収し・装着者に供給してくれる程度の、便利な魔法道具に成り下がっています。

・・・最も、一度装着すれば、仮の持ち主である私が死なない限り、外す事の出来ない【呪い】がかかっていますが。』

「・・・とりあえず、宝具はともかくステータスはどれだけ下がっ

てるんだ・・・後、お前結構性格悪いだろ？」

「ステータスについてはバーサーカーの方も、纏めてマスターとしての能力で確認して頂ければ早いでしょうが・・・意外な事を言いますねカリヤ、私はこちらが【素】ですよ？」

『正直な所、この状態では他サーヴァントとの戦闘は避けた方がいいので、カリヤはバーサーカーと行動してください。』

私は出来るだけ魔力供給手段を何とかします、共倒れだけは絶対に避けなければならない。

それと、これは忠告だ・・・いくら指輪の供給があっても、サーヴァントの維持に必要な魔力の持ち主はあくまでもカリヤだ、バーサーカーを暴走させればその分の負担は【自分自身】で払う事になる。

通常の戦闘なら指輪の魔力だけで耐えられるが、【暴走だけ】はさせるな。死ぬぞ。』

「・・・そうか、よく分かった、肝に銘じとく。」

「理解して頂けたようで何よりです、カリヤがマスターで私は嬉しいです。」

にこにこ笑っているとしているドラグーンを、雁夜は微妙な気持ちで見ている。

確かに、自分を案じて色々と行動してくれているように見えるし、その発言も的外れではないのだ。

このサーヴァントの言っている事は、確かに正しいのだろう。

だが、悪意に満ちたこの屋敷で過ごしていた雁夜には　　その

言葉を、心から信じる事は出来なかった。

何故ここまで徹底的に情報の秘匿をしたいのか、仮にもマスターである自分に真名を明かせないのは何故だ。

それに・・・酷く嘘くさい気がするのだ、さつきから笑っているが、
【笑顔】《コレ》は本当に信用出来るのか？

本当に、心から笑っているようには見えない、まるでそう・・・出来の良【仮面】でも見ているような・・・。

「カリヤ、とりあえず部屋に戻りましょう。そろそろあの少女が目覚ましてもいい頃です。傍にいて差し上げた方が良いかと。」

「あ、ああ・・・そうだな、桜ちゃんも俺がいなくなってたらきつと驚くしな。」

だが、ドラグーンに声をかけられ、雁夜はその考えを後回しにする事にした。

部屋においてきてしまった桜が心配だし、もし一人きりの状態に戸惑っていたら可哀そうでならない。

この屋敷で桜の味方は自分だけなのだ、出来るだけ一緒にいてあげたい。

そう考えると、雁夜はドラグーンと恐らく近くにいるだろうバーサーカーを連れて部屋に戻っていったのだった。

< キキキ >

その数分後、その場に一匹の蟲がいた事に、気付かないまま。

・・・ちなみに、その後、言われたとおりにサーバントのステータスを確認した雁夜が、
ドラグーンとバーサーカーに対して内心愚痴を呟いていたのは、彼等だけの秘密である。

（何でこんな・・・っ宝の持ち腐れ状態になってんだああ！（泣）
）
（さて、これからどうやって戦うかな・・・暫くは【頭】で戦うしかないか？）

（

主従契約（自己紹介編）（後書き）

自己紹介編はこれにて一度終了です。

次回はお互いの目的についての確認に移ります。

雁夜の願いは、果たして二人のサーヴァントに受け入れられるのか？

次話「主従契約（参加理由）」を、お楽しみに・・・

ステータス情報が更新されました くマトリクス*1く (前書き)

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。

それでも見てやろう!という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

今回は二人のサーヴァントの情報更新です。

雁夜おじさんが把握できている内容が増える度に随時更新されていく仕組みになっています。

その時は改めて【ステータス情報が更新されました】、という項目を作成します。

徐々に明らかになっていきますが、どうかご了承くださいませm)

—) m

ステータス情報が更新されました (マトリクス*1)

今回は本編ではありませんが、見ていってくださると嬉しいですね！
ちなみにステータス&宝具は、雁夜おじさんが二人の能力を把握するたびに更新されます。

現在は秘匿されている情報もあるので、見れない！と思うかもしれませんが、
どうかそこはご了承くださいませ；

ステータス情報が更新されました。

【クラス】 バーサーカー

【マスター】 間桐雁夜

【真名】 ????????

【性別】 男性

【身長・体重】 191cm 81kg

【属性】 秩序・狂

【筋力】 A 【魔力】 C

【耐久】 A 【幸運】 B

【敏捷】 A 【宝具】 A+

【クラス別能力】

・狂化 C(B)

本来ならばBで召喚される筈だったのだが、ドラグーンが同時召喚された【弊害】によりランクが1ダウンした。

その為、ギリギリ理性を残し、簡単な思考ができ、通常の会話はかろうじて意思疎通ができる程度になっている。

しかし、一度戦闘となれば箍が外れ文字通りの止まることを知らない狂った戦士となってしまふ。

【保有スキル】

・精霊の加護 A

精霊からの祝福により、危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せる能力。

その発動は武勲を立てうる戦場のみに限定される。

・無窮の武練 A+

一つの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。

心技体の完全な合一により、いかなる精神的制約の影響下にあっても十全の戦闘力を発揮できる。

【宝具】

・『????????』

ランク：A++

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

使用されていない為、詳細は分からないが発動は可能状態。

・『????????』

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

召喚された時から発動していた自らのステータスを隠蔽する能力。

その他にも相手に成り代わる能力も持っているが、狂化の影響で変装することは出来ず、黒い霧で存在を隠す程度に劣化している。

令呪の使用によって本来の能力を発揮する事が可能。

・『????????』

ランク：A++

種別：対人宝具

レンジ：

最大補足：

バーサーカー本来の宝具。

使用されていない為、詳細は分からないが、ある条件を満たす事で使用出来る。

【補足】

通常ならば意思疎通が困難なバーサーカー、しかしドラグーンと同様に召喚をされてしまった為、こちらにも多少の弊害が出てしまった。

狂化のクラスが1ランク低下したせいか、単純な会話ができるようになってきているようなのだが・・・？
本能的にドラグーンを警戒している、逆にマスターである雁夜には何故かぎこちない。
しかし戦闘になれば無類の力を発揮する、まさに無双の強さを秘めている。

【クラス】 ドラグーン

【マスター】 間桐雁夜

【真名】 ??????

【性別】 男

【身長・体重】 176cm 63kg

【属性】 中立・善

【筋力】 C 【魔力】 C

【耐久】 C 【幸運】 C

【敏捷】 C 【宝具】 EX

【クラス別スキル】

・ 龍殺し A

かつて幻想種たる竜種を退治した逸話を持つ英霊にのみ与えられるスキル。

あらゆる竜種とその因子を持つ者に攻撃する事で、通常よりもダメージに大幅な補正がかかる。

・ ???? A

現在は発現する事が出来ない・・・

【保有スキル】

- ・自己魔力生成 B

その身に竜の因子を宿している為、僅かな魔力供給でも自らの内で増幅可能。

しかし供給される魔力量によってその増幅量も変化する為、供給量が少ないと宝具が使用出来なくなる。

- ・奇襲 A

生前の戦闘経験から派生したスキル。

このスキルがAの場合、あらゆる状況からの奇襲は成功する。

ただし、同ランクの『直感 A』スキルを持っている者には回避される事もある。

- ・言語理解 C

あらゆる存在の『言葉』を理解出来るスキル、ランクが高ければ高い程理解出来る種族の枠は増加する。

Cの場合は動物の言葉が理解出来る程度。

- ・神性 C(B)

神霊適性の高さ。

高ければ高い程、神との交わりが深いことをしめしている。

だがドラゴンの神性は【なんらかの理由】で低くなっているようだ。

【宝具】

- ・『?????』

EX

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人
常時発動型の為、本人に影響を与える。
既に使用されているらしいが、今回は教えてもらえなかった。

・ 『????????』 A+

種別：対人宝具

レンジ：1～10

最大補足：1人

魔力不足の為使用不可

・ 『????????』 EX

種別：対界宝具

レンジ：1000～3000

最大補足：1000人

魔力不足の為使用不可、しかし【消滅】を前提でならば使用可能

・ 『????????』 B

種別：????

レンジ：????

最大補足：????

雁夜にドラグーンが渡した指輪、だが本来の所有者は別にいるので、本来の使い方は出来ない。

ドラグーン曰く「預かっているだけ」との事、

本来の所有者以外が身に付けるとドラグーンが装着者が死ぬまで外せない【呪い】がかかっている。

【補足】

本来ならば呼び出される筈が無かった八番目のサーヴァント、正規

のクラスの枠が無かった為に【ドラグーン】のクラスで現界した。その能力はバーサーカーと同程度か少し上の筈なのだが、現在はバーサーカーに雁夜の魔力が行くように自らパスを狭めた。

その為、極度の魔力不足に陥り全ステータスが激減してしまっている。

それどころか常時発動型の宝具以外が使用不可能という、いつ倒されても不思議ではない状態にまで追い詰められている。

しかし本人はその状態をそこまで気にしていない様子であり、穏やかに笑いながらも雁夜やバーサーカーに一線を張るような態度をとっている。

何を目的とし、何を考えているのか今一つ理解出来ない青年であるが、【雁夜を守る】事に関しては積極的のようだ。

ステータス情報が更新されました くマトリクス*1く (後書き)

今回はステータスの更新を行いました、前回の雁夜おじさんの叫びが聞こえるようです；

最強だと思ったら、恐ろしい程の魔力消費量で自分が吐血しまくるのが確定のサーヴァント。

最強かと思いきや、一気に底辺付近まで下がったステータスと魔力不足で全力で戦えないサーヴァント。

・・・これは大変です。

ここから雁夜おじさんはどう戦っていくのか？

二人のサーヴァントはどうするつもりなのか？

少しずつ運命は捻じ曲がっていきますので、これからも頑張って更新します！

それでは、此処までの閲覧、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6086z/>

たとえ、世界を滅ぼしても ~第4次聖杯戦争物語~

2011年12月23日23時55分発行